産業観光
きりゅう紀行 88

産業発展に密接に関係 プラスαで楽しませる憩いの湯

三吉湯

織物産業の一大集積地であった新宿村（現在の三吉町・錦町・浜松町・新宿）には、事業の拡大により多くの従業員が集まり、女性従業員用の寄宿舎を構える機屋も多かった。独特の西洋建築で地域内でも異彩を放つ三吉湯は、1日の汗を流す人々で賑わったという。

三吉湯の創業は1931年（昭和6）。元々は材木業を営み、その後銭湯として事業を開始した。現在は2代目・大石八郎さんと3代目・直樹さん親子が90年近く続く老舗を切り盛りする。最盛期には市内に40件以上あった銭湯も、現在では4件を残すのみ。繊維産業に密接に関連し発展した桐生の銭湯の中、現在も稼働する三吉湯は生きる産業遺産といえる。

そんな数を減らしていく銭湯に足を運んでもらおうと、直樹さんが脱衣場の一部を飲食スペースとして改装し、2008年に食事処「桐巨樹（きりのき）」としてオープンした。直樹さんは、割烹やレストランなどで料理長としても腕を振るった料理人。県内唯一の銭湯に併設する食事処では風呂上がりに楽しめるバラエティ豊かなアルコールドリンクや各種おつまみをはじめ、本格定食まで味わえる。また、今年3月には8年ぶりに浴場壁面のペンキ絵をリニューアル、その作業風景を一般公開し話題を呼んだ。日本に3人しかいない銭湯絵の絵師・中島盛夫さんの作業風景や銭湯絵が描き換えられる様子を一目見ようと多くの人が集まり、東京から足を運んだ人もいた。その他にも、三味線と太鼓の演奏会や親子向けイベントも計画中で、銭湯プラスα（アルファ）で個人から家族連れ、老若男女にそれぞれの楽しみ方を提案する。

「日本人ほど風呂好きの国民はいない」と言われるほど、日本と風呂の関係は深い。独特の魅力を求めて、銭湯に親しむ外国人旅行者も増えているという。地域に根付く銭湯文化は日本が誇るべきもので、その貴重な存在が桐生にあることを再認識し、市民で守っていく必要がある。

●場所／桐生市三吉町1–2–15　●電話／0277–44–3277　●営業時間／午後3時30分～午後10時　●定休日／日曜日
●入浴料／大人（中学生以上）360円・中人（小学生）150円・小人（幼児）70円